



1 真下さん（写真右）と齋田さん（写真左）の背景に広がるのは、2人の会社と工房がある亀岡の風景。悠々と流れる保津川沿いでは毎年花火大会が行われ、多くの人で賑わいを見せる。2 手で彫ったとは思えない描写を得意とする齋田さんのつくばい。「伝統工芸士」の技術を垣間見られる作品。3 長岡銘竹のプロダクトで一番人気の京銘竹を使ったボトルスタンド。ボトルを穴に通すと自立し、インテリアとしても楽しめる。「パンブーデザインコンペ2016」受賞作品。

「長岡銘竹株式会社・齋田石材店」 自分たちの手で海外へ届けて 伝統工芸の未来を切り開く

京都府亀岡市から竹垣と石灯籠の技術を海外へ届ける取り組みが始まっている。日本庭園を基盤にした展開から見えてくる次世代につなげたい伝統工芸の可能性とは？

取材・文 ● 西川有紀 撮影 ● 増田好郎

アメリカでの実演を叶え 肌で感じた新たな可能性

日本ではあまり知られていないが、アメリカには公共の日本庭園が大小合わせて200以上もある。日本と関わりが深い地域に作庭されることが多く、日本文化を体感できる癒やしの場所。全米最大級の日本庭園があるミズーリボタニカルガーデンや、アンダーソン日本庭園、ポートランド日本庭園、モリカミ日本庭園などが有名で、日本のそれに勝るとも劣らない美しさを誇り、

アメリカ人を魅了している。そんなアメリカを代表する日本庭園で、2016年（平成28）に日本人で職人として初めて伝統工芸の実演を行ったのが、桂離宮などの竹垣を手掛ける長岡銘竹の竹垣職人・真下彰宏さんと、明治時代から続く齋田石材店の五代目齋田隆朗さんだ。きっかけは、2人が所属する京都の伝統産業若手職人育成事業、京都職人工房だと齋田さんは語る。

「京都の若手職人の交流会に参加をした際に、シカゴで日本の工芸品店を営む泉さんという方に会ったんです。泉さんが職人工房から生まれたプロダクトを披露するイベントを行うということだったので、参加する方たちと一緒にシカゴへ行くことにしました。そこで泉さんが紹介してくれたのがアンダーソン日本庭園のキュレーターでした。その場でどんな話が盛り上がり、庭園で開催する夏祭りに参加する約束をしたんです」

日本へ帰るや否や、職人工房のメンバーで唯一日本庭園に関連のある真下さんへ声を掛けた齋田さん。「19歳のときにニューヨークへ一人旅で訪ねて以来だったので、20年ぶりのアメリカ行きは戸惑いもありました。

でも昔からアメリカへの憧れもあって、挑戦してみたいという気持ちのほうが大きくなっていました」（真下さん）
夏祭りで行った、京都の伝統工芸士による実演は大好評。真下さんは茶室に付ける枝折戸を制作。その戸は今も庭園で実際に使われている。齋田さんは石を鑿（ひ）き、アンダーソンのロゴマークである龍安寺のつくばいの文字を彫る実演を行った。

「アメリカの日本庭園の竹垣や石灯籠は中国のものがほとんど。竹垣を手で作り上げ、石に文字を手で彫っている姿を見ていただき、現地の人に感動してもらうことができました。日本では実演をするという発想はなかったのですが、海外で制作する姿を見せること

能動的な活動のきっかけは 衰退する伝統工芸への危機感

京都府では、未来の伝統産業を担う若手職人の中でも、特に技術が優れている職人に「京もの認定工芸士」の称号を授与している。真下さんは2015年に認定されているが、称号を受けようと思うに至るターニングポイントがあったと言う。

「長岡銘竹へ入社してから3年ほど前までは、主に造園会社の下請けの仕事をしていました。しかし、和風建築が

減っていくこのご時世で注文が激減。日々の仕事のなかで技術は磨いてきましたが、このままだと会社が倒産するかも、僕が首になるかの2択しかないところまで来たんです。それなら、自分でできることをやろうと思い、会社案内のパンフレットを制作して、直接仕事を受けられることをPRしました」
会社の名前が少しでも広まればと、「京もの認定工芸士」を取得。竹を使ったボトルスタンドの商品化や、ECサイトの立ち上げ、工房での竹かごワークショップの開催など、竹垣の事業を成長させるために、竹を使ったさまざまなプロモーションを展開した。

長岡銘竹は指名で仕事の依頼が来るほどに成長。さらに海外展開により、会社のブランド力も増している。

一方、齋田さんが家業を継いだのは20歳のとき。2007年に「京もの認定工芸士」の称号を受け、その後「伝統工芸士」を取得。手先の器用さを武器にめきめきと頭角を現し、石灯籠の魅力が自分なりに解釈した作品を手掛けるまでになった。しかし、庭を造る家が減少していく時代の波から、石灯籠の需要への危機感を覚え始める。

そこで考えたのが、海外展開も視野に入れた自社のホームページの立ち上げだった。2010年にオープンする



真下さんの手つきを見守る現地の人々の視線は、真剣そのもの。実演後にサインを求められることもある。（写真提供：長岡銘竹）



アンダーソン日本庭園での記念写真。来年は2月にモリカミ日本庭園（フロリダ）での実演が決まっている。（写真提供：長岡銘竹）

その 特集 | つながる、京都
世界とつながる伝統工芸

と、ある日突然イタリア人の女性からホームページ経由で石灯籠が欲しいと問い合わせがくる。

「イタリアからわざわざ亀岡まで石灯籠を見にきてくれたんです。輸送の関係でうまく話は進みませんでした、その後すぐに彼女を訪ねて3週間ほどローマへ行くことにしました」

もともとローマの石文化に興味があった齋田さん。この渡伊をきっかけに、齋田さんが制作した石灯籠がローマに据えられることになる。

「日本食レストラン『Dozo(どうぞ)』へ通っていたら、店のテラスに石灯籠

を置いてもらえることになったんです。今もローマ時代から残っている壁の前で佇んでいます」

現在このレストランはローマでの作品展示や実演の拠点になっている。

時代の境遇から、能動的な活動へと変化していく2人。今後はユニットとして、海外の人にも分かりやすい資料を作成し、何ができるのかを見える化しながら活動の幅を広げていく予定だ。

和の文化を重んじるアメリカ人デザイナーに共感するイタリア人

今年の9月、ミズーリボタニカルガ

ーデンの日本庭園で開催された日本祭りにも参加した真下さんと齋田さん。

3日間にわたり実演を披露し、2万人の来場者に日本の工芸の魅力を届けてきた。真下さんは毎年アメリカを訪ねるたびに、アメリカ人に日本の和の心が浸透していることを感じるといふ。

「日本の文化が好きで興味を持っていくアメリカ人は、日本人以上にジャパニーズスピリットを理解しています。礼儀正しいですし、人を思いやる心が素晴らしいです。行くたびに丁寧におもてなしをしてくれるので、滞在中はいつも楽しい時間を過ごせています」

それとは別に、ものづくりの国イタリアは、日本の伝統工芸の捉え方が、アメリカと少し違うと齋田さんは言う。「日本・京都というキーワードや、歴



1 京都市洛西竹林公園に設置されている真下さんの袖垣。玄関脇の目隠しに使われている。2 鉋やつるのこ、ペンチや剪定ばさみなどの道具と、手を使って竹垣を制作する。



「40代はまだまだ若手。職人は一生勉強」と真下さん。日々の仕事で技術を高める努力を惜しまない。

提案ができないか。特別な空間ではなく、普段の暮らしに伝統工芸を取り入れる。まずはこの新しいアイデアをイタリアなどの海外で提案し、日本にも逆輸入という形で紹介できたらと話す。

る。その姿は、2人が心の底から楽しむ、海外の人に喜んでもらいたいという思いがあることを物語っている。「もしかしたら、海外で認められるのは次の代になるかもしれない。時間がかかることだからこそ、今のまま伝統をバトンタッチするのではなく、海外

での基盤をつくって、次の世代が展開しやすい形をつなごうと思います」若い人に伝統工芸をもっと身近に、興味を持ってもらえるようになるのが目標だと語る、真下さんと齋田さん。「おこがましいかもしれませんが、他の職人さんにも、僕らが認められるこ

とで、海外での可能性を感じていただけたらうれしいです」そして2人の姿勢はとて謙虚。まさに、日本人の和の心そのものだ。京都の亀岡で育まれていく伝統工芸の灯は、海外を通して、次の世代へと受け継がれていくだろう。

齋田さんは仕事の合間を縫って現地へ足を運び、次の展開につなげている。そうするようになったのは、ハワイにある日本文化会館へカタログを送ったけれど返事が来なかったという過去の経験があるからだ。



「自分で足を運び伝えるというのが、やりたいことへのショートカットだと実感しています。もし僕が逆の立場でも、メールや郵送だけなら返事をしないかもしれないです。便利な世の中だからこそ、会いに行くことで熱意や人柄をダイレクトに伝えられる。労力もお金もかかりますが、だからこそ本気になって取り組むと思います」



3 浄瑠璃寺形の石灯籠。「何百年も経過したような風化を自分の手でどこまで表現できるかが面白い」と齋田さん。4 店の前には30基ほどの石灯籠つくばいが並ぶ。事前に制作を行い、苔をまわらせて完成となる。5 道具は金槌と太・細・長の3種類の鑿だけ。